



アルゼンチン・ブエノスアイレス ある家庭の昼食のようす(解説:裏表紙)

帝国書院撮影の
写真はこちらから!!



CONTENTS

パソコンの方はQRコードをクリックすると
リンクページに移動します。

中学校 社会科の しおり

2017年度 **3** 学期号

帝国書院

教授用資料



①



②



③



④

バンドネオン



⑤

⑥

(写真：帝国書院 2016年9月撮影)

表紙写真解説

アルゼンチンの生活・文化を訪ねて

帝国書院取材班

アルゼンチンの食卓

表紙の写真はアルゼンチンの一般的な家庭である。撮影時は9月で季節は冬。お昼にエストファドという牛肉の煮込み料理を食べているところだ。エストファドは、牛肉やじゃがいも、にんじんをトマトと塩で煮込んでおり、素材の味を生かした料理となっている。

そして、アルゼンチンの最も代表的な料理がアサードである。アサードとは肉を丸焼きする料理法をさし、牛・豚・チョリソーなどさまざまな肉を焼き、ここに野菜は含まれない。薪をくべて、長い時間をかけてじわじわと焼いていくが、この焼き方にも微妙な火加減が必要らしく、鍋奉行ならぬアサード奉行が少しずつ薪を動かしていく(写真①)。ちなみに家畜の多くが牛であるため豚は貴重で、特別な場でのみ焼かれるそうだ。

野菜をほとんど食べないアルゼンチンの人々にとって、なくてはならない飲み物がマテ茶(写真②)である。マテ茶に含まれる豊富なビタミンは大変貴重で、いたるところで飲んでいる人々をみかける。飲み方は独特で、ひょうたん型の入れ物に茶葉をぎっしり詰め、ボンピージャとよばれる金属製のストローをさしてお湯を注ぐ。飲むときはボンピージャに手を触れないようにし、飲んだあとは「おいしい」「ちょっと熱い」などと感想を述べるのが礼儀である。緑茶にコーヒーの苦みを加えたような味で、最初は抵抗感があるものの慣れるとくせにな

る。アルゼンチンの人々は同じ茶葉に何度もお湯を注いで、みんなで1日中まわし飲みしている(写真③)。

迫りに圧倒されるタンゴ

タンゴはブエノスアイレス市のボカ地区で19世紀後半に生まれた。ボカ地区はかつてアルゼンチン随一の港町として栄え、ヨーロッパからの移民や奴隷として連れてこられたアフリカ系の人々が暮らしていた。タンゴはそうした環境のなか、複数の民族音楽が混じり合ってきた。

演奏においてタンゴの雰囲気をかもしだすために最も重要なのが、「バンドネオン」という楽器である。アコーディオンの鍵盤のかわりに両側にいくつものボタンをつけたような楽器で、演奏の難易度は大変高い。ほかにもピアノやウッドベース、ギターなどと一緒に演奏し、ダンスの合間には歌が披露される(写真④)。

親しまれる日本の技術

写真⑤は、日本が譲渡した東京都の地下鉄丸ノ内線の車両である。ブエノスアイレスの地下鉄では、日本で20年前に廃車となった銀色の波模様が特徴的な丸ノ内線の車両が今でも走っており、乗ってみると日本語で書かれた当時の発着駅や注意書きなどが残っている(写真⑥)。この車両ができてからは50年以上たっているにもかかわらず、座り心地のよさや、なめらかな走りは変わらない。日本の車両がアルゼンチンの人々からも大切に使用されていることがうかがえた。